



画廊に入ると我々が普段よく知っている文房具、食料品、飲料水が並んでいる。これらは全て槇野央が樺や松といった木材を掘り込み、着色した「作品」である。画廊内の照明を取り替えようとしているのかと思いきや、蛍光灯とそのパッケージも「作品」であることには驚愕した。

槇野はそれまで彫刻を行ってきた。しかし木彫だけではつまらないと、現在の作風に転じた。このような動機を持つために彫刻の木目を見せず、全て着色し磨いている。作品のモチーフは、日常生活していて気になるものを選択する。トリック・アートは決して目指さない。好きだから制作すると言う。では何故このような作品なのか。

まず注目すべきは、作品の全ては自然物ではなく商品であることだ。商品は必ずパッケージ化されている。パッケージの役割は商品を擁護するよりも、広告が前提となっている。しかし槇野の作品に、資本主義を風刺し揶揄する方向性は見受けられない。それでもパッケージが工業製品であることは、忘れてはならない。

次に想起すべきは、彫刻とは模倣から始まる事実である。あらゆる芸術は模倣から始まると言われている。「自然は事実の本質の模倣である」と言ったのはプラトンである。現在、あらゆる芸術論を含む哲学が、この模倣を解読出来ていない事実をここに記すべきであろう。模倣は事実の本質＝アイデアとは振り分けられるべきだし、単なる「お手本」の域を超えている。

哲学の分野では、模倣する為に必要なのはテクネーであり、テクネーの語源が芸術となり、本来の意味の技術が現代のテクノロジーに派生したと考えられている。

槇野の作品に再び眼を向けてみよう。するとここには、テクネー＝技術が全く介在していないことに気がつく。よく見れば形、色と何がしかが不自然である。槇野が模倣しているのはその形象ではなく、雰囲気であることが理解できるのだ。

莫大な数が生産される工業製品に、オリジナルは存在しない。パッケージのどこかの印刷が微妙にずれているし、商品そのもの素材の斑や偏りが生じてしまうのが常である。つまり、同じものは唯一つとして生み出すことができないのだ。

それでは槇野は工業製品のアイデアを彫っているのか。どこにもない、こうである姿を捉えるのではなく、何処にもある、こうでない姿＝雰囲気こそ、槇野が必要としているのではないだろうか。

そもそも彫刻とは何か。具象/抽象隔てなく、自らの内に存在するイメージを何とか表出しようとするのが芸術のあり方ではないだろうか。すると槇野が制作する彫刻とは、彫刻本来のあり方に近づこうとする意志が働いているということが出来るのではないだろうか。

自らの内にあるイメージを模倣することこそ、困難極まる作業はない。なぜなら、模倣すべきオリジナルを求めてはならないからだ。オリジナルなど存在しない。それは近代が生み出した神話である。

当然のことながら槇野の彫刻は、このような堅苦しい議論を必要とせず、凜然と佇んでいる。その素材である樹木が朽ち果てるまで。(宮田徹也/日本近代美術思想史研究)

